

翻訳

きつねーちゃんとオオカミ (No.1, No.7) 他 Лисичка-сестричка и волк (Аф.1, Аф.7) и др.

アフナーシエフ収集「ロシア民話」より
перевод сказок из сборника
《Народные русские сказки А. Н. Афанасьева》

水上 則子¹
MIZUKAMI Noriko

はじめに

A.H. アフナーシエフの収集によるロシア昔話集から、No.1, 7, 23, 25, 32, 38, 39, 41, 42 の9編を訳出した。このうち、No.1 と No.23 は、金本源之助による日本語訳が刊行されているが、以下のような方針に基づいて改訳を試みたものである。

1)ロシア語で使用されている用語や表現を可能な限り忠実に日本語に移す(具体的には、*сметана* を「クリーム」のように訳すのは避け、「スメタナ」とするなど)

2)原文にない修飾語を付加したり、原文にある語を省いたりすることを最小限にする

3)題名は可能な限り直訳し、話の内容を付記するなどして改変することは避ける

アフナーシエフ昔話集では、類話とみなされるものを連続させて並べ、同じ題名を与える、という編集が行われている。具体的には、No.1-No.7 の7編が「Лисичка-сестричка и волк」であり、No.23-No.26 の4編が「Мужик, медведь и лиса」、No.37-No.39 の3編が「Кот, петух и лиса」、No.40-No.43 の4編が「Кот и лиса」である。金本は、「Лисичка-сестричка и волк」では、No.1-6を訳してNo.7を残し、「Мужик, медведь и лиса」では、No.23, 24, 26を訳してNo.25を残し、「Кот, петух и лиса」では、No.37を訳して

No.38, No.39を残し、「Кот и лиса」では、No.43を訳して、No.40-42を残している。金本に訳されなかった作品の日本語訳は、類話を比較研究する際の一助となり得るであろうが、「Кот и лиса」のNo.40は、中村喜和により翻訳されているため、今回は対象としなかった。

No.1 Лисичка-сестричка и волк (きつねーちゃんとオオカミ)

じいさんとばあさんが暮らしていました。じいさんはばあさんに言います。「ばあさん、ピロークを焼いておくれ、わしは魚をとりに行こう」魚をたくさんとって、荷車を一杯にして家に帰ります。その途中で、ふと見るとキツネが丸くなって道に寝ています。じいさんは荷車から降りて、キツネに近づきましたが、キツネは身動きせず、死んだように横たっていました。「これはかみさんの土産になるな」とじいさんは言い、キツネを拾って荷車に積み、自分は前に乗りました。ところがキツネは、ころあいを見はからって、少しずつ荷車から放り出し始めました一魚という魚を、一匹また一匹と。全部放り出してしまうと、キツネは逃げ去りました。

「ばあさんや」とじいさんは言います。「お前の外套に付ける上等な衿を持ってきてやったよ」「どこに?」「あっちだ、荷車に載っているよ、魚も衿も」ばあさん

は荷車のところに行ってみました、袴もないし魚もないので、亭主を罵りだしました。「もうろくじい！呆れたもんだよ！また騙したね！」そう言われてじいさんは、キツネは死んでいなかったのだとわかり、嘆きに嘆きましたが、どうにもしようがありませんでした。

キツネは道に投げた魚を全部集めて積み上げ、座り込んでせつせと食べていました。向こうからオオカミがやってきます。「こんちわ、おばちゃん！」「こんちわ、おっちゃん！」「魚、くれよ！」「自分でとって食べなさいよ」「できないよ」「なに言ってるのさ、あたしもこんなにとってるんだから。あんたね、川へ行けばいいんだよ、おっちゃん。尻尾を氷の穴に垂らせば、魚のほうから尻尾にくっついてくるよ、長く座っているようにするんだよ、そうしないとどっさり獲れないよ」

オオカミは川へ出かけ、尻尾を氷の穴に垂らしました。冬のことでした。じっと座って、一晚中座ったままでいたので、オオカミの尻尾は凍りはじめました。ちょっと持ち上げようとしたが、どうにもなりません。「しめしめ、どっさり魚がくっついて、上がらないくらいなんだな！」とオオカミは思います。見ると、おかみさんたちが水を汲みにきて、灰色オオカミを見つけて叫びます。「オオカミだ、オオカミだよ！ぶち殺して！ぶち殺して！」みんなで駆け寄ってぶちはじめました。天秤棒や、桶や、手当たりしだいのもので。オオカミは跳びあがり、尻尾がもげて、一目散に駆け出しました。「上等じゃないか」と考えます。「おまえさんにはお返しをしてやるぞ、おばちゃん！」

きつねーちゃんは、魚を食べてしまうと、何かをくすねることができないか、やってみたくまりました。お百姓の家に忍び込むと、おかみさんたちがブリヌイを焼いていて、木桶に生地が入っているところに頭を突っ込んでしまっ、べったりと付けて逃げ出します。すると向こうからオオカミがやってきます。「お前さん、いい加減なことを教えたな？さんざんぶちのめされたよ！」「あれま、おっちゃん」ときつねーちゃんはいいます。「お前さんは血が出たくらいで済んでるけど、あたしは脳みそよ。お前さんよりひどくぶたれたんだから。歩くのもしんどいのよ」「本当だなあ」とオオカミはいいます。「おばちゃん、歩くどころじゃないな。乗りなさい、送ってやるよ」キツネはオオカミの背中に乗り、オオカミはキツネをおぶって歩き出しました。きつねーちゃんは背に乗って、小さな声でこう言います。

「ぶたれ者がぶたれない者を運ぶ、ぶたれ者がぶたれない者を運ぶ」「おばちゃん、何を言ってるんだい？」「あたしはね、おっちゃん、ぶたれ者がぶたれ者を運ぶ、と言ってるのよ」「そうだよなあ、おばちゃん！」

「ねえおっちゃん、お互い小屋を建てようじゃないの」「そうしよう、おばちゃん！」「あたしは樹皮で作るから、あんたは氷で作れば」ふたりは仕事にとりかかり、小屋を作り上げました。キツネの小屋は樹皮で、オオカミの小屋は氷で、その中で暮らしています。春がやってきて、オオカミの小屋は溶けてしまいました。「おばちゃん！」とオオカミは言う。「また俺をだましたな！お前を食ってやらなくちゃ」「おっちゃん、もう一つ競争しましょうよ、どっちがどっちを食べるか」きつねーちゃんはオオカミを、森の中の深い穴のところへ連れて行き、言います。「跳んで！もしこの穴を跳び越えたら、あたしを食べたらいいわ、でも跳び越えられなかったら、あたしがあんたを食べるから」オオカミは跳び上がって穴に落ちました。「さて」とキツネはいいます。「ずっとそこに座っていればいいわ！」そして自分は行ってしまいました。

キツネはめん棒を抱えて歩いていき、お百姓さんに、家に入れてほしいと頼みます。「きつねーちゃんを入れて、泊めてくださいな」「うちはおまえさんが来る前から狭いんだ」「あたしは場所をとりませんよ。自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、めん棒はペチカの下に入れますから」入れてもらえました。キツネは自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、めん棒はペチカの下に入れました。朝早く、キツネは起きると、めん棒を燃やしてしまい、それからこう訊ねます。「あたしのめん棒はどこでしょう？ガチョウだって代わりにならないのに！」お百姓さんはどうしようもなく、めん棒の代わりにガチョウをキツネにやりました。キツネはガチョウをもらって、歩きながら歌っています。

きつねーちゃんが道を歩いていく

めん棒を持っていたけど

めん棒の代わりにガチョウを！

とん、とん、とん！ 二軒目のお百姓さんちを叩きます。「誰だね？」「あたしです、きつねーちゃんです、入れて、泊めてくださいな」「うちはおまえさんが来る前から狭いんだ」「あたしは場所をとりませんよ。自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、ガチョウはペチ

カの下に入れますから」入れてもらえました。キツネは自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、ガチョウはペチカの下に入れました。朝早く、キツネは起きると、ガチョウをつかまえて、羽をむしって食べてしまい、こう言います。「あたしのガチョウはどこでしょう？七面鳥だって代わりにならないのに！」お百姓さんはどうしようもなく、ガチョウの代わりに七面鳥をキツネにやりました。キツネは七面鳥をもらって、歩きながら歌っています。

きつねーちゃんが道を歩いていく
めん棒を持っていたけど
めん棒の代わりにガチョウを
ガチョウの代わりに七面鳥を！

とん、とん、とん！ 三軒目のお百姓さんちを叩きます。「誰だね？」「あたしです、きつねーちゃんです、入れて、泊めてくださいな」「うちはおまえさんが来る前から狭いんだ」「あたしは場所をとりませんよ。自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、七面鳥はペチカの下に入れますから」入れてもらえました。キツネは長椅子に寝て、尻尾はその下に、七面鳥はペチカの下に入れました。朝早く、キツネは起きると、七面鳥をつかまえて、羽をむしって食べてしまい、こう言います。「あたしの七面鳥はどこでしょう？花嫁さんだって代わりにならないのに！」お百姓さんはどうしようもなく、七面鳥の代わりに花嫁さんをキツネにやりました。キツネは花嫁さんを袋に入れて、歩きながら歌っています。

きつねーちゃんが道を歩いていく
めん棒を持っていたけど
めん棒の代わりにガチョウを
ガチョウの代わりに七面鳥を
七面鳥の代わりに花嫁さんを！

とん、とん、とん！ 四軒目のお百姓さんちを叩きます。「誰だね？」「あたしです、きつねーちゃんです、入れて、泊めてくださいな」「うちはおまえさんが来る前から狭いんだ」「あたしは場所をとりませんよ。自分は長椅子に寝て、尻尾はその下に、袋はペチカの下に入れますから」入れてもらえました。キツネは長椅子に寝て、尻尾はその下に、袋はペチカの下に入れました。お百姓さんはそっと袋から花嫁さんを出してやり、そこへ犬を押し込んでおきました。朝になって、きつねーちゃんは出かけようとして、袋を持ち、

歩きながらこう言います。「花嫁さん、歌を歌って！」ところが犬が突然唸りはじめました。キツネはびっくりして、犬の入っている袋をいきなり放り投げて逃げ出します。

キツネは走りながら、門の上に雄鶏がいるのに気づいてこう言います。「雄鶏さん、雄鶏さん！ここへいらっしゃい、懺悔を聞いてあげるから。お前さんには70人も女房がいて、いつも罪深いんだから」雄鶏は降りてきました。キツネは捕まえて食べてしまいました。

No.7 Лисичка-сестричка и волк (きつねーちゃんとオオカミ)

あるときキツネが、一揃いの馬具と荷車ごと馬を盗んで、森を乗り回し始めました。向こうからクマがやってきます。「キツネさんや、乗せておくれ」とクマが言います。「お乗りなさいよ、まだら脚のじいさん！」クマは乗りました。出発すると、向こうからオオカミがやってくるのに出会いました。「キツネさんや、乗せておくれ」とオオカミが言います。「お乗りなさいよ、灰色の悪党さん！」そのあとには向こうからやぶにらみの兎がやってきます。「キツネさんや、乗せておくれ」と言います。「お乗りなさいよ、やぶにらみさん！」こうして4匹で出発して、歌を歌い始めました。

突然ながえが折れてしまいました。キツネはクマに言います。「ミーシェンカ、あんたが行ってながえを持ってきて」クマが森に入ると、木々がびしびし音を立てます。おびただしく木を倒し、結局いちばん大きくて太い木を選んで、キツネのところへ持って行きました。「これはながえには向かないわ、まだら脚のミーシカ！灰色オオカミ、あんたが行ってちょうだい！」とキツネはいいいます。オオカミは出かけて行って、やはり立派な木を持ってきましたが、一回り小さいだけでした。「これもだめじゃない」とキツネはいう。「やぶにらみの兎さん、あんたが行って取ってきてよ！」兎は出かけて行って、細い枝を持ってきました。「あんたたちはみんな、考えるってことをしないのね！私が自分で行くわ」とキツネはいいいます。

キツネが歩き回っている間に、クマとオオカミは馬を食べてしまい、馬の皮に苔を詰めて、生きている馬であるかのようにもう一度車につながりました。キツ

ネはすばらしいながえを選び出しました。荷車のところへやってくると、クマもオオカミも兎も乗っていません。キツネはながえを取り替え、馬を走らせようとしたのですが、馬は動きません。手綱を引っ張ったり、棒でたたいたりしてみました、馬は倒れてしまいました。キツネが荷車から降りて馬を見ると、苔が詰まっていた肉はすっかり食べられているのがわかりました。泣きに泣いて、また森を自分の脚で歩き始めました。

キツネはいけすから魚をくすねるようになりました。人間たちは見当がついたので盗人を捕まえよう決めましたが、キツネは、機転の利く女のように、最後に魚をごっそり盗んで、森を歩きだしました。向こうから灰色オオカミがやってくるのに出くわしました。「何を食べてるんだい、キツネさんよ？」とオオカミが尋ねます。「魚だよ、おっちゃん」「どこから持ってきたんだい？」「自分で捕まえたのよ」「どうやって捕まえたんだね？教えてくれよ！」「はいはい、おっちゃん、教えますとも！バケツを用意して、尻尾に結び付けて、氷の穴に下げるのよ。魚はあんたのところへ集まってきて、自分でバケツに入るから。氷の穴のところに2時間くらい座っているだけよ！」オオカミはその通りにしました。しかし2時間もたつと、尻尾は氷の穴に凍り付いてしまい、どれほど頑張っても抜けなくなりました。朝には人間たちがやってくるオオカミを殺してしまいました。

キツネはクマの巣穴へやってくると、頼み込んでそこで冬籠りをさせてもらうことになりました。冬を越すために、キツネはひよこを蓄えていて、自分の下においておき、少しずつ食べていました。クマがあるとき尋ねます。「おばちゃん、何を食べてるんだね？」「あのね、おっちゃん、おでこから脳みそを引っ張り出して食べているのよ」「うまいかね？」とクマが尋ねます。「おいしいわよ、おっちゃん」「ちょっと味見させてくれ！」キツネはクマにひよこの肉を少しやりました。ミーシカは喜んで食べて、おでこから脳みそを絞り出し、頑張って頑張って、死んでしまいました。キツネにはうれしいことでした。これで食べ物はあるまる1年分、柔らかい寝床も、暖かいすみかもあるのですから。

No.23 Мужик, медведь и лиса (お百姓とクマとキツネ)

お百姓が畑を耕していると、クマがやってきてこう言います。「お前を片輪にしてやる！」「だめだ、手出しをしないでくれ。ほら、蕪を播いて、自分は根っこをとって、お前には上の方をやるから。」「よしよし」とクマは言います。「だがもし騙したら、森には薪一本取りに来るなよ！」と言うと、オークの森へ帰って行きました。時が来ました。お百姓は蕪を掘り起こしています、クマが森から這い込んできます。「おい、分け前をよこせ！」「わかったよ！上の方を持ってくるよ」そして蕪の茎と葉っぱをやまほど持って行きました。

クマは分け前をちゃんともらえたので満足していました。お百姓は自分の蕪を荷馬車に積んで町へ売りに出かけました。向こうからクマがやってきました。「お百姓さん、どこへ行くんだね？」「町へ根っこを売りにいくんだよ、クマさん」「ちょっと食べさせてくれ、根っこはどんな味なんだ」お百姓はクマに蕪をやりました。クマは食べるやいなや「なんてこった、百姓め、騙したな！」と叫びました。「お前の根っこは甘いじゃないか。二度とたきぎを取りに来たりするなよ、八つ裂きにするぞ！」お百姓は町から帰ると、怖くて森に行けなくなりました。棚だとか、腰かけだとか、桶だとかを代わりに燃やしていましたが、しまいにはどうしようもなくなりました—森に行くしかありません。

そおっと忍び込んだら、どこからともなくキツネが走ってきました。「お百姓さん、どうしたんです」とキツネは訊きます。「そんなふうにかっそり忍び歩きをして？」「クマが怖いんだ、わしに腹を立てていてさ、八つ裂きにするっていうんだよ」「クマなんか怖がらないでたきぎをおとりなさい、わたしが狩りのふりをしてあげますよ。もしクマが『あれはなんだ？』と聞いたら、『オオカミとクマの狩りをしているんだ』と答えればいい」お百姓はたきぎを切りはじめました。見ると—クマが走ってきて、お百姓にこう言います。「じいさん！あの叫び声はなんだ？」お百姓はこう言います。「オオカミ狩りですよ、クマもね」「なんだって！お百姓さん、櫓に乗せてくれ、たきぎの下に隠れるから、縄で縛ってくれ。丸太を運んでいると思うだろうから」お百姓はクマを櫓に乗せ、縄で縛って、斧の背で頭をめった打ちにして、クマを殺してしまいました。

キツネが走ってきていいました。「クマはどこですか?」「ほら、くたばったよ!」「よかったですね、お百姓さん、それでは私にごちそうでもして下さらなくちゃ」「そうしようとも、キツネさん。うちに来てくれ、ごちそうするから」お百姓は櫓に乗ってゆき、キツネはその前を走ってゆきます。お百姓は家に近づくと、口笛で犬を呼び集めてキツネにけしかけました。キツネは森へ向かって駆け出し、穴に飛び込みました。穴に隠れてこう尋ねます。「私の目よ、私が逃げているとき、何を見ていた?」「キツネさま、私たちは、あなたが躓かないように見張っていましたよ」「耳よ、何をしていた?」「ずっと耳を澄ましていました、犬たちが遠くを追いかけているのかどうか」「尻尾よ、何をしていた?」尻尾は答えました。「私は足の下で揺れていました、あなたの足がもつれて、転んで、犬の餌食になるように」「何ていう奴だろう! お前なんか犬に食われてしまうがいい」そうしてキツネは、穴から尻尾を出して叫びました。「犬よ、キツネの尻尾を食うがいい!」犬たちは尻尾をつかんで引っ張りだして、キツネを噛み殺しました。よくあることです。尻尾をやられれば頭もおしまいになるのです。

№.25 Мужик, медведь и лиса (お百姓とクマとキツネ)

農夫がクマと一緒に蕪を蒔き、いい蕪ができました。クマは農夫に言いました。「お前は根っこ、おれは上をとる」農夫は冬の間食べることができましたが、クマは飢えて死にかけました。翌年、クマは農夫に言いました。「小麦を蒔こう」いい小麦ができました。「今度はお前が上を取れ」とクマは農夫に言いました。「おれは根を取る」農夫は冬の間食べることができましたが、クマは飢えてあやうく死にそうになりました。三年目には、農夫は一人で耕していました。クマが農夫のところへやってきてこう言いました。「農夫よ、お前を食べてやる、お前はおれをだますから」しかし農夫はこう言いました。「ちょっと待ってくれ、耕し終わるまで。」クマは農夫の荷車の下に横になりました。

このときキツネが農夫のところへ駆けてきてこう言います。「農夫さん、死から助けてあげましょう、そうしたら何をくれますか?」農夫は言いました。「めんどりを一袋」「いいでしょう。それでは聞きますが、荷車の

下にあるのはなんですか?」クマは農夫に言います「丸太だと言え」キツネは言います「もし丸太なら荷車に結び付けなければ。」

このときキツネはちょっとその場を離れ、そのあとでまた戻ってきて農夫に言います。「荷車の下にあるのはなんですか?」農夫は言いました。「丸太だ」「もし丸太なら、斧を打ち込まなければ」クマは農夫に言います。「斧を打ち込んでくれ」農夫は斧をクマの背に打ち込んで、クマはそのために死にました。キツネは農夫に言います。「お約束のめんどり一袋をください」

翌日農夫は農地に袋を持って出かけましたが、その中には二羽の鶏と足の速い犬が入っていました。突然キツネが走り寄ってきて農夫に言います。「めんどりを持ってきましたか?」「持ってきたよ」「一羽ずつ放してください、全部一度にはではなく」農夫は鶏を放し、二羽目を放し、それから犬を放しました。犬はキツネを追いかけ、キツネは犬から逃げて穴へ駆け込みました。

犬は穴のところに立っていて、キツネは自分と話しています。「足よ、お前たちは何をしていた?」「走りました」「目よ、お前たちは?」「見ていました」「耳よ、お前たちは?」「聞いていました」「尻尾よ、お前は?」尻尾はいいます。「私は、足の下で邪魔になっていました、あなたが転ぶように」このときキツネは尻尾に腹を立てて、尻尾を穴の外に出しました。「犬よ、尻尾を食べてしまえ!」犬は尻尾をつかんでキツネを捕え、引っ張り出して引き裂いてしまいました。

№.32 Лиса и дятел (キツネとキツツキ)

むかしむかしオークの木に、キツツキが巣をかけて暮らしていて、卵を三つ産み、三羽のひなを孵しました。そこへ迷惑なことにキツネがやってくるようになりました。オークの湿った幹を尻尾でこんこんと叩きます。「キツツキさん、キツツキさん! オークから下りて。オークの木が入用でね。セチヒチキ(?)²を作るから」「キツネさんよ! ひなを一羽育てるのも待ってくれないのかね」「キツツキさんよ! 投げてよこさない、わたしが仕込んで鍛冶屋にしてやるから」キツツキがキツネに投げてやると、キツネは茂みから茂み

へ、森から森へと追いかけて、食べてしまいました。
またキツツキのところへやってきて、オークの湿った幹を尻尾でこんこんと叩きました。「キツツキさん、キツツキさん！オークから下りて。オークの木が入用でね。セチヒチキ(?)を作るから」「キツネさんよ！ひなを一羽育てるのも待ってくれないのかね」「キツツキさんよ！投げてよこしなさい、わたしが仕込んで靴つくりにしてやるから」キツツキがキツネに投げてやると、キツネは茂みから茂みへ、森から森へと追いかけて、食べてしまいました。

またキツツキのところへやってきて、オークの湿った幹を尻尾でこんこんと叩きます。「キツツキさん、キツツキさん！オークから下りて。オークの木が入用でね。セチヒチキ(?)を作るから」「キツネさんよ！ひなを一羽育てるのも待ってくれないのかね」「キツツキさんよ！投げてよこしなさい、わたしが仕込んで仕立て屋にしてやるから」キツツキがキツネに投げてやると、キツネは茂みから茂みへ、森から森へと追いかけて、食べてしまいました。

No.38 Кот, петух и лиса (ネコとオンドリとキツネ)

あるところにネコとヒツジが暮らしていました。オンドリもいっしょにいました。

ネコとヒツジは菩提樹の皮をはぎに出かけました。キツネが窓の下に、オンドリのところへやってきてこう言います。

にわとりさん、にわとりさん、
金のとさか
つやつやの頭！
ほら、種入りのレピョーシカをあげましょう
カルポフさんちの庭に
そりすべりの山がある
ひとりで動く櫓がある
ひとりで滑るそり
走りたがっている！

オンドリが顔を出しました。キツネはオンドリをさらしました。オンドリは道々叫びました。「ネコさん、ヒツジさん！キツネが僕をさらっていく、高い山の向こう

へ、暗い森の向こうへ」聞きつけて引き返してきて、オンドリを取り戻しました。

翌日、オンドリに言い聞かせます。「いいかい、もしキツネが来ても、顔を出すんじゃないぞ！」キツネがやってきて、同じ歌を歌いいただきました。オンドリは顔をだし、キツネがさらっていきました。ネコとヒツジはまた取り戻しました。三日目、オンドリに言い聞かせます。「いいかい、窓の外を見るんじゃないよ。ぼくらは今日は遠くへ行くんだから、どんなに叫んでも聞こえないからね」キツネがやってきて、とても甘い声で歌い始め、オンドリはがまんできなくなって顔を出しました。キツネはオンドリをつかまえて家にさらっていきました。オンドリは道々叫びに叫んだが、ネコとヒツジには聞こえませんでした。家に帰ってきたが、オンドリがいません！ヒツジ弦のグースリを作って、キツネのところへ、オンドリを取り戻しに出かけました。

キツネには7匹の娘がいました。ネコとヒツジは窓の下へやってきて演奏を始めました。「チュク・チュク、ヒツジ弦のグースリ！器量よしのキツネが金の巢に住んでいた 7匹の娘がいた 最初の娘はチューチュエルカ(カカシ)、二番目はチューチュエルカっぽい、三番目はパダイ・チュエルノク(ポピンをおくれ)、四番目はメチ・シェストク(ベチカを掃け)、五番目はトルブ・ザクリヴァイ(煙突を塞げ)、六番目はアグニャ・ヴブズドゥヴァイ(火を熾せ)、七番目はペキ・ピラギ(ピログを焼け)！」キツネが言います。「チューチュエルカ、見に行きなさい、あんな面白い歌を歌っているのは誰だろう？」チューチュエルカが出ていくと、ネコとヒツジは顔をびしゃり、箱に入れてしまいました。

こうしてキツネの娘は全部、一匹ずつ同じようにして捕まりました。

それからキツネが自分で出てきました。二人は顔をびしゃり、箱に入れてしまいました。小屋へ入ると、まだ生きていたオンドリを取り戻し、家に帰って幸せに暮らしました。

No.39 Кот, петух и лиса (ネコとオンドリとキツネ)

ネコとオンドリが暮らしていました。ネコは菩提樹の皮をはぎに森へ行くので、オンドリに言って聞かせます。「もしキツネがやってきて、遊びに来るようにと

呼んでも、キツネのほうに顔を出しちやいけな、さもないとさらわれてしまうよ」

キツネがやってきて、遊びに来るようにと呼びました。「オンドリさん、オンドリさん！打穀場へ行こう、金のリンゴを転がして遊ぼう」オンドリは顔を出してしまい、キツネはさらっていききました。オンドリは叫び始めました。「ネコさん、ネコさん！キツネが僕をさらって行く、険しい山を越え、速い川を越えて」ネコがこれを聞いてやってきて、オンドリをキツネから助けました。

ネコはまた菩提樹の皮をはぎに行くので再び言い聞かせます。「もしキツネがやってきて、遊びに来るように言っても、顔を出しちやいけな、さもないとまたさらわれてしまうよ」キツネがやってきて、同じように呼び始めました。オンドリは顔を出してしまい、キツネはさらっていききました。オンドリは叫び始めました。「ネコさん、ネコさん！キツネが僕をさらって行く、険しい山を越え、速い川を越えて」ネコがこれを聞いて駆けつけてきて、オンドリをふたたびキツネから助けました。

ネコはまた何かを作るために菩提樹の皮をはぎに行くとして、こう言います。「今度は遠くへ行くからね。もしまたキツネがやってきて、遊びに来るように言っても、顔を出しちやいけな、さもないとさらわれてしまうだろう、どんなに叫んでも聞こえないよ」ネコは出かけてしまいました。キツネがまたやってきて、また同じように言い始めました。オンドリは顔を出してしまい、キツネはまたさらっていききました。オンドリは叫びだしましたが、叫んでも叫んでも、ネコはやってきません。

キツネはオンドリを家に連れ帰って、焼こうとしました。そこへネコが駆けつけてきて、尻尾で窓をたたき始めてこう言いました。「キツネさん、お屋敷でいい暮らしだね。上の息子はヂメシヤ、下の息子はレメシヤ、惣領娘はチューチェルカ(カカシ)、二番目はチューチェルカっぽい、三番目はメチ・シエストク(ペチカを掃け)、四番目はパダイ・チェルノク(ボピンをおくれ)！」

ネコのところへキツネの子供たちが次々に出てきました。ネコは全部殺してしまいました。そのあとでキツネ自身が出てきました。ネコはキツネも殺してオンドリを死から救い出しました。

ふたりは家に帰って、暮らしを立てて蓄えをこしら

えました。

№.41 Кот и лиса (ネコとキツネ)

じいさんとばあさんが暮らしていました。じいさんとばあさんには、息子も娘もいなくて、灰色のネコが一匹いるだけでした。ネコは二人に飲み物や食べ物を与えて、テンヤリス、エブライチョウ、クロライチョウなどさまざまな動物を運んでくるのでした。灰色ネコも年をとりました。ばあさんはじいさんに言います。「じいさん、なんでネコを置いておかなくちやいけなんですか？ペチカの上の場所ふさぎですよ！」「どこへやったらいいのかね？」「背負い袋に入れて小さな林に連れて行ってください。そこで自分の生き方を決めさせましょう」じいさんは連れて行きました。ネコは林に残されて、おなかがいいたまま一日、二日、三日と過ごし、泣き出しました。キツネがやってきてネコに尋ねました。「何を泣いてるんです、コタイ・イヴァノヴィチさん？」「ああ、キツネさん、どうして泣かずにいられよう？じいさんとばあさんのところで暮らして、飲み物や食べ物を与えてきたのに、年を取ったら追い出されたんだ」とするとキツネは言います。「コタイ・イヴァノヴィチさん、それじゃ結婚しましょう！」「結婚だって！自分の頭を養うのも精いっぱいなのに。お前さんにはたぶん子供もいて、飲み物や食べ物を与えなくちやいけなだろう」「大丈夫ですよ、なんとか養っていきましょう」こうしてキツネはコタイ・イヴァノヴィチに嫁ぎました。

あるときクマとウサギがキツネの巣穴のそばを通りがかりました。キツネはふたりを見ると叫び出しました。「ああ、かかとの太いクマさん、そしてやぶにらみのウサギさん！私がやもめだったときには、あなたがたのどちらも私の巣穴のそばを通らなかつたのに、私が嫁いたら毎日通るんですね。すっかり道ができてしまった！気をつけなさいよ、コタイ・イヴァノヴィチにぶちめされないようにね！」さて、道を歩きながら、クマはウサギに言いました。「おやおや、あいつ結婚したって？コタイ・イヴァノヴィチ？おれより大きいのかな？」「兎はいいいます。「おれよりすばしこいのかな？明日行って、見てみよう」翌日キツネの巣穴のところへやってきて、見ると、ネコは雄牛の杭を丸ごとかじり、のどをごろごろ鳴らしていました。「少ないぞ、少

ないぞ！」「おやおや」とクマはウサギに言いました。「厄介だな。コタイはずっと『少ない、少ない！』と言ってるぞ。隠れよう、お前は枝の下に入れ、おれは木の上に登るから」それぞれが自分の場所に落ち着いたと思う間もなく、枝の下からネズミが走り出てきました。ネコはそれを見とすぐさまそれを追いかけて枝のほうへ突進しました。ウサギは驚いて走り出しました。クマは騒ぎを聞いて振り向こうとしましたが、恐怖のあまり木から落ちて、ひどく打ちつけて死んでしまいました。キツネとネコは現在まで暮らしていてクマを食べています。

No.42 Кот и лиса (ネコとキツネ)

ある国に、鬱蒼と茂った森に強いネコが住んでいました。クマとオオカミとシカとキツネとウサギが集まって相談をしていました。どうやって、強い力のあるネコを宴会に招いたらよいかというのです。あらゆるしたくをして、それから考え始めました。誰がネコを迎えに行ったらいいでしょう。「クマさん、あんたが行きなよ！」クマは言い逃れをしようとしました。「おれは毛むくじらで足がびっこだ、おれなんかじゃだめだ！オオカミが行くといい」オオカミはいいます。「おれは身軽じゃないし、おれの言うことになど耳を貸さないだろう。シカが行くといい」シカも拒みます。「わたしは臆病で気が小さいから、答えをもらえないでしょう。ネコはたぶん、答える代わりに私を殺すでしょう。お前さんが行くといい、素早いんだから」とキツネに

言います。「別嬪だし、抜け目がないし」「私は尻尾が長くて、速く走れないんです。ウサギを行かせましょう！」とキツネは答える。

こうしてみんながウサギに押し付けようとしていました。「行って来いよ、やぶにらみ！怖がることはない。身軽だし、足も速い。もしネコが向かってきても、逃げられるよ」ウサギはなすすべがなく、ネコのところへ駆けて行きました。到着すると、ネコの足よりも低くお辞儀をして、宴会に、集まりに招待しました。すべて指図どおりにして、力の限り駆け戻ってきました。仲間のところへくるとこう言います。「恐ろしかった！ネコは褐色で、毛は逆立っていて、尻尾は地面を引きずっているんだ！」そこで動物たちはめいめい身を隠し始めました。「クマは木の上へ登り、オオカミは茂みに入り込み、キツネは地面にもぐりこみ、シカとウサギはどこかへ行ってしまつて・・(結末はこれの前のお話と同様)³。

文献

[日本語文献]

中村喜和(編訳)1987. アファナーシエフ ロシア民話集 (上)(下). 岩波文庫

金本源之助(訳)2009-2011. アファナーシエフ ロシアの民話(1)(2)(3)(別巻). 群像社

[ロシア語文献]

Афанасьев, А. Н(1984-1985) Народные русские сказки А. Н. Афанасьева: В 3 т. М.: Наука. (Лит. памятники)

注

¹ 新潟県立大学国際地域学部

² (?)は原文によるもの。また、この印が付されている *сечихичики* (セチヒチキ) という語は、方言辞典でも「語義不詳」とされており、語り手の造語と考えられて

いる。

³ No.42 は末尾が切れた状態で、このように記されて終わっている。この注記の原文は以下の通り。(Окончание — то же, что и в предшествующей сказке.)